

詞と語について

詞 と語について。筆者： twitter.com/awesomenewways

屈折の一般について

詞の種類

詞には以下の種類があります。

(1) 詞の種類：

(1)a. 単調詞: 条件アクセントでないアクセントが一つだけあるもの。

(1)b. 半調詞: 条件アクセントが一つだけあるもの。

(1)c. 重調詞: アクセントがちょうど2つあり、後部だけが条件アクセントであるもの。

(1)d. 無調詞: アクセントがないもの。

また、詞と語について、アクセントがあるものを**有調**、ないものを**無調**といいます。

条件アクセントは、以下の規則に従います。

(2) 条件アクセントの一般規則：

(2)a. 語基のアクセントが語基の末尾にあるときは、自身が上つきになり、語基のそのアクセントは下つきになります。

(2)b.語基のアクセントが自身の1モーラ左か、それよりも右側にあるときは、自身が上つきになり、語基のそのアクセントは下つきになります。

(2)c.ただし、語基のアクセントが語基の冒頭にあるときは、条件アクセントは常に下付きになり、語基のそのアクセントは常に上付きです。

この規則を適用した後の綴りにおいて、発音に反映されるのは上つきのアクセントだけです。上つきのアクセントの直後のモーラを含む音節の最初のモーラは必ず nF になり、語境界からそのモーラまでの領域もすべて nF になります。語が複数の詞を含むときは複数の上つきアクセントを含むことができ、その場合、あるアクセントによってすでに nF であることが指定されている領域について、他のアクセントが重複して nF を指定していることがあります。その場合、発音は最後の上つきアクセントだけがある場合と同じになります。

単調詞のアクセントは常に上つきであり、半調詞のアクセントはある時には上つきで他の場合は下つきであり、重調詞のアクセントは、最初のアクセントは常に上つきであり、次のアクセントはある時には上つきで他の場合は下つきになります。

語尾と語基

ふたつの詞が隣り合うとき、それぞれの詞が自分自身のみで語を構成するのでない場合は、それは**屈折**であると考えられ、その際に左側の詞を**語基**といい、右側の詞を**語尾**といいます。

詞がこのように隣り合っているときは、それが語基と語尾である場合と、語の連続である場合があることになります。語が単に連続している場合は、条件アクセントは「反応」しません。すなわち、すべての語の形状は単独の単調詞または無調詞として記述することができ、語が連続した場合の発音は一つの語につき最大でひとつのアクセントによって確定します。それに対して、ふたつの詞の連続が語基と語尾の関係にあるときは、語尾が条件アクセントを含んでいる場合があり、その場合は語尾のアクセントの関係によって全体の発音が決まります。

語尾となる詞はその綴りの中に**屈折記号**を持ちます。屈折記号には音価はありません。屈折記号は、その語尾が形容詞または動詞の語尾であれば・(middle dot)、名詞、形容名詞、または時名詞であれば- (hyphen minus) です。

屈折は最終的には必ず語を構成しますが、それまでに何回屈折が行われるかは語基と語尾の組み合わせによります。語の内部では、詞が隣り合うときは必ず屈折があるので、語が n 個の詞を含んでいるときは、必ず $n - 1$ 回の屈折が行われたことになります。屈折は必ず左側の語基と右側の語尾の関係で行われ、語尾はその内部に詞を複数含むことはありません。従って、語を構成する詞の屈折関係は常に左枝分かれの二分木で表現することができることになります。

例えば、「食べさせられなかった」は以下のように構成され、 $'tabès'asèr'a'rè'nakatta$ と書かれます。

(3) $((('tabè + s'asè,) + r'arè,) + 'a'nakatta) \rightarrow 'tabès'asèr'a'rè'nakatta$

3 ではわかりやすくするために括弧を使っていますが、屈折は常に左枝分かれの二分木で表されるということから、かっこは本来不要です。

なお、ここに出てくる $r'arè$ は受け身の意味であって可能の意味ではありません。

「食べる」は「食べられる」、「飲む」は「飲める」となり、形状が一貫しないため、ここで可能の意味を担うとされる「れる・られる」は詞として記述することができません。

詞境界と語境界

詞の両側にはかならず詞境界があります。また語の両側にはかならず語境界があります。語境界はかならず詞境界ですが、詞境界はかならず語境界であるわけではありません。

(4) 語境界の一覧

- R1, R2, A1, A2, A3, A4 (C2b), C1, C2, C3, C4 (R2c), R2b, P1 (R2d), P2, P3, P4 (C3b)

これらの詞境界は概ね ver. 2.6 における以下の詞境界と以下のように対応します。

- ASFI: R1
- Attributive: R2
- Nominal: A1
- Resultative: A2

- Conditional: A3
- Adverbial: A4 (C2b)
- Complementary: C2, C3
- Suppositional: C4 (R2c)
- Factual: R2b
- Indirective: P1 (R2d)
- Indicative: P2
- Jussive: P3
- Final: P4 (C3b)

C1 は 2.6 における語境界とよく対応するものがないため、3.0 で新規に導入された語境界であるといって差し支えありません。Complementary は 3.0 で C2 と C3 に分割されました。ASFI は 2.6 では Attributive, Suppositional, Factual, Indirective の総称でしたが、3.0 では語境界として独立しました。

語境界の名前は境界同士の関係を表しています。語境界の名前はアルファベットと数字の組み合わせからなり、右側のアルファベットが同じ語境界同士では、数字が小さい方が「深い」語境界です。より「深い」語境界は、右側の語に対してより「浅い」語境界として振る舞うことができます。例えば、A1 を右側に持つ語は、A4 を左側に持つ語に接続することができます。逆方向からこのことを考えると、左側の語境界はより「深い」語境界として振る舞うことができますと言えます。

詞境界のうち、かっこつきで別名が示されているものは、この互換関係がひとつだけでないことを表しています。例えば、C4 には R2c という別名があります。このことは、C4 は R1 と互換性があるより「浅い」語境界としても振る舞うことができることを表しています。小文字のアルファベットは、同様に R1 と互換性があるほかの語境界から区別するために付けられているもので、小文字のアルファベットで区別される語境界は互いに互換性を持ちません。例えば、左側に R2c を持つ語は右側に R2b を持つ語に接続することはできません。

この互換関係は、そのふたつの語境界を結ぶ無音の語が日本語の文法に備わっていると考えることで説明することができます。文の中における語同士の接続関係を図などで表すときには無音の語は省略することもあります。3.0 で採用している語境界の新しい名前スキームは、無音の語をいちいち表示しなくても、ふたつの語境界が音を伴わずに繋がっていることを示すことができるように作られています。

次の表は、いくつかの無調語と上掲の詞境界との関係を示したものです。真ん中のグレーの行より上にある白い枠は、その枠の左端の位置に当たる語境界を左側に持ち、同様に枠の右端の位置にあたる語境界を右側に持つ語のグループを表しています。グレーの行よりも下にあるものは、逆に、枠の左端の位置が右側の境界を、右端の位置が左側の境界を示します。グレーの行の一番下書いてあるのは、各境界を右側にもつ語の機能を覚えやすくするためのキーワードです。

すべての語の統語的な位置づけは左右の語境界がどれとどれであるか、すなわち論理的に可能な $15 \times 15 = 225$ のグループのうちのどれに所属するかを述べることによって記述されます。各グループに所属する無調語を例示しますが、ここで取り上げるグループは、実際に筆者が見つけてリストアップしたものに限定されています。また、ここでは無調語のみを取り上げます。

語境界のリストは教育ローマ字の規則の一部ですが、どの語が225のグループのうちのどれに所属するかは規則の一部ではありません。教育ローマ字を書くときは、作業負担の軽減のために既知の語の語境界の記述を頼りにすることはできますが、語の記述にこだわることなく、規定されている境界にあてはまる境界を扱う文などの中にひとつひとつ見つけて、語境界であればスペースで示し、語の内部の詞境界であれば屈折記号で示す、という地道な作業を行うのが本来です。語や詞のプロパティとしてのその左右の境界は、そのような作業の結果として二次的にかつ自動的に得られるものに過ぎません。ただし、各グループに所属するものとしてここで具体的に取上げている語は規則の一部たる境界リストの根拠となります。したがって、ある発話の途中で特定の種類の境界を認定する場合は、既に認定されている他の語とその境界を共有することが根拠になります。また、既に記述してある語の振る舞いを見直し、認定を修正することにより、ある境界を持つとされるすべてのグループの所属語がゼロになった場合は、規則を改定する必要があることとなります。

										でしたか類				
										な類				
										だ類		っけ類		
										でした類			ってば類	
										じゃないか類				
										でしょう類				
か類①		なら類				か類②								
		を類									のか類			
R1	R2	A1	A2	A3	A4	C1	C2	C3	C4		P1	P2	P3	P4
					C2b				R2c	R2b	R2d			C3b
時制	関係	モノ	費用	条件	話体	付帯	結果	既成	仮想	事由	主節	丁寧	疑問	談話
		の類												
				で類										
					だと類									
だった類														
		の類②												
					でも類		から類							
				に類				ん類						
					ならば類									
		か類③												
					のに類									
					からには類									
			と類											
					けれども類									
					って類									

でしたか類

左にC3を、右にP4を持つグループです。このグループには以下の無調語があります。

- desitaka
- desuka

desitaka と desuka はどちらもモノや状態を表す言葉に接続し、丁寧体の疑問文を作ります。desuka に対して desitaka は過去の出来事について尋ねる言い方です。

な類

左にC2を、右にR2bを持つグループです。このグループには以下の無調語があります。

- na

na はモノや状態を表す言葉に接続し、話題となっているものがその状態にあることについて、後続する言葉で述べることができる形を作ります。

C2R2b na が属すな類は C2 と C3 が分かれたことの影響を受けるグループの一つです。左側の境界が C2 であることにより、「ん」Rb2C3 nn に後続できないことが正しく記述されるようになりました。具体的には、「明日はお休みなので」Asi'ta hà Oyasumi' na node に対して「*明日は休むんなので」*Asi'ta hà Ya"sum·u nn na node が非文法的であることが正しく捉えられています。

だ類

左にC3を、右にP1を持つグループです。このグループには以下の無調語があります。

- da

da はモノや状態を表す言葉に接続し、話題となっているものがその状態にあることを述べます。ただし、話し言葉ではこの後さらに有音の語を続けるのが談話上ニュートラルです。このことは、P1P4¹ の「だ」で言い切った場合の談話的な効果ないし文の意味を仮託することで記述します。

っけ類

左にP2を、右にP4を持つグループです。このグループには以下の無調語があります。

- kke

kke は事実を求める疑問を表す言葉に接続し、話者が過去にその答えを知っていたが、発話時点では思い出せない状態にあり、答えを求めていることを示します。

¹ このように境界を単に2つ並べて示すことで左の境界と右の境界を示す場合があります。

kke が接続する述語の形は、答えとして求める事実の記憶が過去に聞き手との間で共有された体験を参照する場合は datta などの過去を表す形式になり、そうではなく単に現在思い出することができない事実を答えとして求める場合は、その事実が過去に関するものであるか否かにかかわらず、da などの現在を表す形式になる傾向があります。

- monn

monn は子どもらしい言葉で、事実を述べる言葉に接続し、その事実にこだわる態度を示したり、その事実が自分の他の判断や行動の理由になっていることを示したりします。後者の場合はよく 'datte および nn da と共起します。

でした類

左にC3を、右にP2を持つグループです。このグループには以下の無調語があります。

- desita
- desu

desita と desu はどちらもモノや状態を表す言葉に接続し、丁寧体の平叙文を作ります。desu に対して desita はその事実が現在の事実とは離れて過去のものであるということを述べる場合に、また、その事実が話者にとって明らかになった過去の時点を参照して述べる場合に用いられます。

ってば類

左にP3を、右にP4を持つグループです。このグループには以下の無調語があります。

- tteba

tteba は、話者が聞き手に既に述べた事実を、聞き手がいまだにその事実に応じた態度を示さない場合に、繰り返し述べて苛立ちを表現し、また、その事実に応じた行動を暗に要求する言葉です。P3に接続することから分かる通り丁寧体でも使うことができますが、打ち解けた間柄でなければ使いにくい言葉です。

- yotte

yotte は tteba と似ていて、既に伝えたはずの事実を繰り返し述べて聞き手に対する苛立ちを示す言葉です。tteba が聞き手が話者の述べた事実についての態度を留保している場合に使われやすいのに比べ、yotte は聞き手がはじめてから話者の話をよく聞いていない場合に使われやすいです。

- yo

yo は話者が述べている内容が聞き手の認識や意向に反すると思われるときに、話者が聞き手に話者の主張を飲み込ませたり、従わせるために語調を強めていう時に使う言葉です。命令語と共に使った場合、打ち解けた男性同士の会話のように響く場合と、非常に高圧的に響く場合があります。相手の考えに反してでも自らの主張を通そうという意味が読み取れるので、このように対立的な響きを持ちやすく、口論などでもよくつかわれます。しかし、相手の態度や気持ちをくつがえそうとする働きから、同様にして弱気になっている聞き手を励ます場合にも使われます。

こそは類

左にA2を、右にA4を持つグループです。このグループには以下の無調語があります。

- kosohà

kosohà は先行する言葉について述べるのが同じ文脈の中のほかのものについては当てはまらない場合を考え、その場合でも先行する言葉については確かに当てはまるということを強調するという言葉です。

- made

made は起点からの距離を考えることができるものを指す言葉に接続し、その中間地点に当たる他のものについては述べるのが当てはまることが含意された上で、接続する言葉についてもまた当てはまるということを強調するという言葉です。

- madehà

madehà は made に似ていますが、距離を考えた上で先行する言葉よりも起点から遠くにあるものについては述べるのが当てはまらないかもしれない場合を考え、その場合でも先行する言葉についてはやはり当てはまるということを強調するという言葉です。

- saèmo

saèmo は先行する言葉とは他のものについて他のものにも当てはまることを含意した上で強調して述べる言葉です。

じゃないか類

左にC4を、右にP4を持つグループです。このグループには以下の無調語があります。

- zyanaika
- zyanaino
- zyann

zyanaika, zyanaino, zyann はいずれも、一度より有標な期待を持っていた話者が、あたりに生じた事態によって事実はより無標なものだったことがあきらかになったときに、拍子抜けしたという気持ちを表して、多くは軽く聞き手を責めながらその事実を述べる言い方です。'nannda とよく共起します。zyanaika は男性的な響きを持ち、zyanaino は女性的な響きを持ちます。zyann は比較的ジェンダーニュートラルですが、子供っぽい響きを持つことがあります。

- kayo

kayo は zyann などと似ていますが、期待を裏切った事実が期待していたものよりも劣るものだった場合に、（多くの場合は聞き手に向けられた）期待はずれで不満だという気持ちを表して用いられます。やはり 'nannda とよく共起します。男性的な響きを持ちます。

に類

左にA1を、右にA2を持つグループです。

- ni

ni は、後続する言葉で示される動作の目的地を表す言葉に接続します。その動作が完了すれば、その動作の主体がそこに移動する場合に用いられます。よく ○ と交代します。

こそ類

左にA3を、右にA4を持つグループです。

- hà

hà は、後続する言葉で述べるのが他のあるものには当てはまらないが、先行する言葉には当てはまるということを表します。ただし、その当てはまらないものは、多くの場合不特定かつ黙示です。文脈上特定されたものに当てはまらないことが含意される場合は、hà を含むアクセント句に \$ が与えられるのが典型的です。²

- mo

mo は hà とは逆に、後続する言葉で述べるのが他のあるものに当てはまり、かつ、先行する言葉にも当てはまるということを表します。hà とは異なり、このときの「他のあるもの」は、文脈によってすでに特定されていることが多いです。

- koso

koso は、こそは類の kosohà と似ていて、後続する内容が他のものに当てはまらない場合でも、その接続するものには当てはまるということを強調して述べる言葉です。

でしょう類

左にC4を、右にP3を持つグループです。

- darou

- desyou

どちらもその接続する言葉が話者の推測であることを示します。推測の内容がいわゆる「強い主張」であるような場合には使いにくく、話者はこれらの語を使うときは、その内容が相手から見て、あるいは第三者から見て受け入れやすいものであることを期待しています。darou, desyou はどちらも常体ですが、darou は男性的で、desyou はニュートラルです。

² \$ については後述しますが、古い資料の中では、「教育ローマ字大全」に記載があります。

よく似た形をした語に _desyoukara など、境界下降を冒頭に持つ複数の自立語があるので注意が必要です。

か類①

左にR1を、右にA1を持つグループです。

- ka

事実を述べる言葉に接続し、その真偽について後続する言葉で述べるための形式を作る言葉です。後続する言葉は「重要だ」や「わからない」といったその真偽を評価する言葉になることが多いです。これらの言葉はほとんど A4 で接続するため、ka との間には A1A4 を構成する付属語があることがあります。

よく似た働きをする同音の語に C2A1 ka があります。意味上はおそらく同一なので、ここだけをみると、R1 と C2 から等しく無料で接続できる C4 を左側に持つものとして両者を統一できそうに思えるかもしれませんが、両者を C4A1 ka としてしまうと、R2bC3 nn に ka が後続しないことが正しく記述されないため、C3 を避けて R1 と C2 に分割しています。

なら類

左にA2を、右にA4を持つグループです。

- nara
- naraba

後続する言葉で述べるのが他のあるものには当てはまらない場合を考え、その場合でも nara が接続する言葉については当てはまるということを述べます。koso とは違い、この時に述べることは、成り立つほうが成り立たないよりも安全であったり好ましいことである傾向があります。

naraba は nara に似ていますが、話し言葉では比較的用いられにくいです。

- nannte

nannte に前接する言葉が指すものが、後続する言葉で述べることに値せず、そのため当然に当てはまらないということを表します。

- sika

複数の物事が文脈で与えられているときに sika に前接する言葉が指し示すものには後で述べるものが当てはまらず、他の全てには後に述べるものが当てはまるということを表します。このとき、sika に続く言葉は否定的な意味をもつ言葉であることが必要です。

か類②

左にC2を、右にP3を持つグループです。

- ka

話者が気にかけていた物事について、話者にその場で与えられた情報を述べる言葉に接続して使う言葉です。気になっていた結果が与えられて、その結果について、意外であったり、落胆したり、あるいは安心したといった心情をよく表します。

を類

左にA1を、右にA4を持つグループです。

- wo

①後続する言葉によって表される動作の対象となる言葉に接続します。wo でマークされるものは、動作の過程で移動したり、状態変化したり、あるいは破壊されたりするなど、動作に対してなされるがまま、動作主に支配される関係にあるのが典型的です。先行する言葉が照応するものが具体的でない場合や、特定可能な場合でもその個体に特筆性がない場合は 〇 と交代するのが典型的です。

②「それを」や「～が～たのを」などの、事実を述べる形式に接続して、「にもかかわらず」あるいは「なのに」に類する意味を表します。

- ga

後続する言葉で述べるのが先行する言葉に当てはまることを示します。ga でマークされる言葉は、特定された照応先があり、また ga を含む AP は \$ が与えられることが多いです。

のか類

左に R2b を、右に P3 を持つグループです。

- noka
- nnda

nnda と noka は C2P3 ka によく似ていますが、男性的な響きがあります。nnda は比較的ジェンダーニュートラルです。

の類①

左に R2b を、右に A1 を持つグループです。

- no

事実を述べる言葉に接続して、後続する言葉でその事実について述べる形式を作ります。このときの事実は、すでに真であることが既知であるものと扱われます。³

で類

左に C2 を、右に A3 を持つグループです。

- de

ものなどの状態などを述べる言葉に後続して、その事実が与えられた上で続けて他の事実を述べる形式を作ります。機能は英語の is .. and とよく似ています。

³ よく似た見た目をもつ形式として動詞語尾の '()r·uno のがあります。これは「日本語を話すのは難しい」のように使われ、事実ではなく行為を表します。これは '()r·u·to と同様、動詞の特定の形式と結びついているため、途中で語境界を持つものとは分析できません。

だと類

左に C3 を、右に A4 を持つグループです。

- dato
- zya

C3A3 de に似ていますが、de に比べると先行する言葉で述べる事実が仮定のものである傾向が強いです。zya と dato はどちらもニュートラルに近く使いやすいですが、改まった話し方や書き言葉では dato が好まれる傾向があります。

- dattaraba
- desitara
- desitaraba
- dattara

dattaraba, desitara, desitaraba, dattara は、相手が言ったことを受けて、それを事実とした上で述べることを続ける形式です。口語で使いやすいのは常体であれば dattara, 敬体であれば desitara で、他の3者は特殊な話体と認識されることがあります。

だった類

左に C3 を、右に R1 を持ちます。

- datta

過去の状態を述べる言葉です。

の類②

左に C1 を、右に R2 を持ちます。

- no

①後続する言葉が先行する言葉でのべる事実が成立した上で**の**ものであることを示します。

②「たくさん」 takusa'nn などの数量語に接続します。

③後続する言葉と先行する言葉が指すもの同士の所有・被所有または所属・被所属関係を表します。「みんな」 minn'na や「ふたり」 huta'ri などの有情の物の数量を表すことばに接続することが多いです。名詞に接続する -_ino との形状の違いに注意が必要です。-_ino が続かないことはそれが名詞ではないと考える根拠になります。

④「強制（する）」や「勉強（する）」など、初期の教育ローマ字で「動名詞」と読んでいたタイプの語の多くが右側に C1 を持つと考えられ、no を接続することでさらに R2 に接続します。ただし、依然として A1 境界を右に持つと考えられる同形の名詞は必要です。（「勉強が」 bennkyou' ga.）同形の名詞と「動名詞」がある場合、「の」が続いた場合にその「の」が -_ino なのか no なのかを判定することが難しい場合があると思われませんが、名詞であれば A1 を持ち、「動名詞」であれば持たないと考え、その文脈における可能な語境界を考えて判別してください。

初期のバージョン以来、「数量語」としてまとめられていた「たくさんの」「少しの」といった量を数えずに表す言葉や、「ふたりの」「10個の」などの数を表現する言葉の多くは、末尾の「の」がこの no と認定されます。このとき、C1R2 no がそこにあるということは、その直前に C1 境界があり、すなわち無料で A4 につながることも同時にみちびかれます。例えば「ふたりの学生が来た」における「ふたり」は、「ふたり学生が来た」のように、他の有音の語を介さずに A4 に接するため、C1 を持つと考えることができます。このとき「ふたり」の右端の境界が R2 ではなく A4 になっていることは \$ 理論により確かめることができます。

でも類

左に C1 を、右に A4 を持つグループです。

・ demo

①仮想の行為などを述べる言葉に接続し、それが必要であったとしてもという意味の文を作ります。

②場所・日時・状況など（TPO）を表す言葉に接続し、ほかのTPOでもいいが、それでもかまわない、あるいはそこにおいてかもしれないことを述べる言葉を続けます。

- nara
- sika
- nannte
- hà

nara, sika, nannte, hà は A 系列に接続するものに似ています。

から類

左に P1 を、右に C2 を持つグループです。

- kara

理由を述べる形を作ります。P1C2 なので、「です」C3P2 desu や「だ」C3P1 da を接続することができます。「だ」C3P1 da を接続すると、再起的に P1C2 kara を接続することができるので、次のように無限に長い AP を作ることができます。

A は B だからだ。

C は A が B だからだからだ。

C' は C が A が B だからだからだからだ。

C'' は C' が C が A が B だからだからだからだからだ。

...

これは日本語の AP の長さに制限がないこと、さらに、単一AP内のF区間の長さに制限がないことを示す端的な例なので音韻論にとって重要です。

けれども類の kara と混同しないように注意が必要です。けれども類の kara は、P2A4 なので、それ自身の直後に C3P1 da や C3P2 desu を接続することができません。また、P1C2 kara は当然 C3P2 desu に直接後続することはできないので、もし「ですから」という並びがあればこの「から」は P2A4 kara であることが推定され、これによって「*C は A が B ですからです」が正しく導かれます。

に類

左に C2 を、右に A2 を持つグループです。

- ni

ni は初期の教育ローマ字において、「する」や「なる」といったものの状態変化を表す動詞と共起する「に」が、ほかの「に」と違った振る舞い（ゼロと交代できない、名詞だけでなく形容名詞にも後続する、「に」がついた形が形容詞のク形と置き換え可能である、など）を示すことから特別に語と認定され、その時々の規定された語境界の体系の中に位置付けられてきました。ver. 2.x のある時期以降は「は」と「も」が後続できるといった一般的な特徴によって他の語と同様の方法で、すなわち、語境界によって、分類されています。C2A2 ni の左側に置かれる言葉は、状態変化の結果となる常体をあらわす言葉です。「する」と「なる」のほかには「見える」や「聞こえる」のような知覚動詞が右側に置かれることがあります。

C2A2 ni をほかの「に」と見分けるわかりやすい方法は、上述のように「なる」「する」「聞こえる」「見える」との共起関係を確認することですが、他の動詞などと共起する場合に、それが C2A2 ni でないことを確かめるには、その「に」に前接しているものを名詞なら形容名詞に、形容名詞なら名詞に置き換えてみるのが簡単です。例えば「誠実に話した」の「に」がもし C2A2 ni なら、形容名詞である「誠実」seizitu' と同じく C2 境界を右側にもつ言葉、例えば「誠実な女性」seizitu'-na zyosei' などと置き換えても、「に」の左右の言葉同士の意味上の関係は維持されるはずですが。ここで前提になっている思い込みは、「統語上の関係が並行的であれば、意味上の関係も並行的である」ということであり、「誠実な女性」の「誠実」の部分、他の形容名詞、たとえば「綺麗」'kirei や「不誠実」hu'seizitu と置き換えても「な」を挟んで左右の意味上の関係は「誠実な女性」の場合と並行的であるということがその一つの例です。そこで、「誠実に話した」の「誠実」の部分、同じく C2 境界を右側にもつ「誠実な女性」に置き換えてみると、実際には「に」を挟んで左右の言葉の意味上の関係が「誠実に話した」の場合とは大きく異なっています。このことから、「誠実に話した」は seizitu'-ni ha'nasita であって、ここにあらわれている「に」は形容名詞語尾であり C2A2 ni ではないということが推定されます。これは C2A2 ni をそうでないものから見分ける一つの方法です。

この ni に関連して特筆すべきこととして、前接する言葉によって後続するものが「する」と「させる」のどちらになるかが変わる場合があるということがあります。たとえば「リンドは幸せになった。」'Rinndo hà Siáwase' ni 'natt-a. という文について考えてみます。ここで表現されている、「リンドが幸せになった」というイベントが誰によって引き起こされたかについて述べる文として「イギはリンドを幸せにした。」'lgi hà 'Rinndo wo Siáwase' ni si'ta. という文を考えます。この場合、主語が幸せな主体である「リンド」から、イベントを引き起こした主体である「イギ」に変わったことに呼応して、述語部分の「なった」'natt-a が「した」si'ta 変わっています。このように、「なる」'nar と「する」su'ru は構文に応じた対応関係があります。ただし、似た条件であっても、「なる」が「する」ではなく「させる」に対応する場合があります。それは例えば「リンドはイギに夢中になった。」'Rinndo hà 'lgi-ni Mutyuu' ni 'natt-a. のような場合です。先ほどと同じように行為者であるイギを主語として文を組み替えると「イギはリンドを夢中にさせた。」'lgi hà 'Rinndo wo Mutyuu' ni sasè't-a. となります。明らかなように、述語は「した」ではなく「させた」となっており、先ほどの「なる」と「する」の関係がここでは「なる」と「させる」の関係に置き換わっています⁴。このように「なる」と「させる」が対応する言葉は、主語となる主体の気持ちを表す言葉で、「y が (x に) 夢中になる」のように、経験者たる主語との間に、経験者が何についてその気持ちを感じているかを表す項がもうひとつ入る言葉だという法則があるようです。この種類の言葉には「夢中に」mutyuu' ni の他に「嬉しく」ure'si·ku (「y が (x が) 嬉しい」) と「悲しく」kanasi·ku (「y が (x が) 悲しい」) が見つかっています。いずれにおいても、上記の例では x で示されている間に入る項は必ずしも発音されないのが厄介です。

ん類

左に R2b に、右に C3 を持つグループです。

• nn

⁴ 「イギはリンドを夢中にした」も問題ない、あるいは両者は意味が微妙に違うと思う方もいるかもしれませんが、しかし、「イギはリンドを幸せにさせた」が明らかに変であることを考えると、やはりここには「夢中」と「幸せ」の振る舞いの違いを見出すことができます。

- no

すでに述べたまたは含意された他の事実と関連づけて他の事実を述べる言い方です。no は非常に限られた場合、とくにだ・である体において用いられ、ほかの多くの場合は nn を使うのが普通です。たとえば、尊敬語を使うような場合であっても「どちらに行かれるんですか？」'Dotira ni ikarè'r-u nn desuka? という意味で「どちらに行かれるのですか？」'Dotira ni ikarè'r-u no desuka? は多くの場合、不自然です。

ver. 2.x では nn をどのように位置づけるかが定まっていなかったですが、C2 と C3 を分割したことでより整合性の高い分析が可能になりました。C2 と C3 は ver. 2.x では区別がなく、まとめて Complementary と呼ばれていました。nn の右側の境界を Complementary としてしまうと、一部の付属語の接続を整合性をもって記述することができず、また、nn を語ではなく後続する音とともに一語をなすものとする、
「んだった」「んでした」「んだ」などコピュラ系の多数の語が生じてしまい、体系が非常に複雑になるという問題がありました。このように、C2 と C3 の区別がない状態では整合性のある文法記述は難しいものとなります。この区別が導入されたことで、nn を語としつつ体系全体の整合性を確保することができました。

ならば類

左に C4 を、右に A4 を持つグループです。

- nara
- naraba

どちらも条件を述べる言葉です。naraba はあんまり使いません。

か類③

左に C2 を、右に A1 を持つグループです。

- ka

C4A1 でない理由についてはか類①の説明を参照してください。

のに類

左に R2b を、右に A4 を持つグループです。

- noni
- node

noni は「にもかかわらず」、node は「だから」という意味です。

両者に共通する「の」の部分を経として切り出してしまわないように注意する必要があります。

からには類

左に P1 を、右に A4 を持つグループです。

- karanihà
- karakoso
- karakosohà
- tte

P1A4 tte は P4A4 tte と混同しないように注意してください。

と類

左に P1 を、右に A2 を持つグループです。

- to

けれども類

左に P2 を、右に A4 を持つグループです。

- keredomo
- ga
- kedomo

- kedo
- keredo

これらは逆接と呼ばれるものです。

- si
- kara

これらは順接と呼ばれるものです。

って類

左に P4 を持ち、右に A4 を持つグループです。

- tte
- to

これらは発話を丸ごと引用して述べる際に使う形式です。

(5) 詞境界のうち語境界でないもの

詞境界のうち、語境界でないものは

語境界の発見と認定について

境界の発見

境界は教育ローマ字を支える基本的なアイデアの一つで、言語の文法を理解するための概念の一つです。例えば「リンドくんがジマンバ梨を食べた。」という文を考えます。我々には先入観があるので、これをなんとなく「リンドくん」「が」「ジマンバ梨」「を」「食べた」というふうに分割したくなると思います。結果的には、これは正しいのですが、このように分割したくなる場合にその事実をどのように理解するかが重要です。「なんとなく」では言語の記述にも文法理論にもならないからです。境界はこのような分割を扱うための概念です。

境界を見つけるためには、少なくともふたつの発話を考える必要があります。(イ)

「リンドくんがジマンバ梨を食べた」という文に加えて(ロ)「イギちゃんがジマンバ梨を食べた」という文を考えます。このとき、両者の後部の(ハ)「ジマンバ梨を食べた」という部分が同一性を持つということを考えます。このようにふたつの異なる発話が部分を共有しているというとき、前提となっている思い込みの一つは、話者はふたつの異なる発話に現れるふたつの部分を同一のものだと認識することができるということです。これが特筆すべき事実であることは、「ジマンバ梨を食べた」という部分は実際に発音される場合は物理現象に過ぎず、かならずしも言語にとって意味があるものであるとは限らないこと、および、どんな話者でも同一の音声を2回発することはできないため、ここで話者が認識する同一性は物理現象としての同一性ではなく、そうであるにもかかわらずそれが同一性を持つという仮定は、物理音とは別のところに抽象的な記号体系があることを示唆することによります。

このように、謎のメカニズムにより、物理現象としては同一であるはずがないふたつの音声を、物理音とは別のなんらかのレベルにおいて同一のものだと認識する仕組みが存在すると仮定して、イとロの共通部分としてハを認める場合、イとロの残りの部分である(ニ)「リンドくんが」と(ホ)「イギちゃんが」が得られます。結果として、イはニ・ハ、ロはホ・ハというふうに分割されます。ここで簡単に中点(・)で示している部分が**境界**です。このとき、この境界は数学における記号のように定義されたものではなく、以上の手続きによってその存在が推定されたものだということに注意してください。われわれは言語記号を直接観察することはできませんが、常になんらかの未知の言語記号が存在すると仮定して作業をしています。その作業の過程で各種の言語記号は上述の手続きで得られるものを含むさまざまな証拠により間接的にその存在が推定されます。端的に言って、言語分析は体系を定義するための手続ではなく、体系を発見するための手続です。

さて、中点で示した境界は、ニ・ハにおける場合とホ・ハにおける場合とで、ともにハが後続するという特徴があります。言語は有限の記号で表現される体系だという立場に立つと、両者の中点は言語にとって同一かもしれないと考える利益があります。そこで、ここで発見され、中点で示している境界を何らかの一貫性のある言語記号であると仮定して、その特徴としてハが後続できることを書き留めておきます。また、実際にニとホが前接していることからニとホが前接できることも特徴として書き留めておきます。このとき、ニ・ハとホ・ハにおけるニとホを入れ替え可能である

ことを確かめることで、両者の中点がやはり同一の言語記号であるということの追加の証拠となります。

以上の手続きにより、境界である言語記号として・が発見され、その特徴として二およびホが前接することができ、またハが後接することができるということが発見されました。

同様の手続きでほかの多数の境界を見つけることができますが、異なる言語記号には異なる名前を与えておくとう便利なので、あらたな境界が発見されるたびに既知の境界とは異なる名前をつけます。このような作業の繰り返しにより、現在規則のなかに位置付けられている数十種の境界が発見されています。

もちろん、言語分析に終わりはないので、新しい境界はいつでも発見される可能性があります。その場合、教育ローマ字の改定によって規則に組み入れられる可能性があります。教育ローマ字では、その綴りの依拠する境界の体系のなかに、書き手がその場で分析してその場で新規に発見した境界を含めることを許可していません。すでに発見されている境界のリストのうち、規則のなかに一部の境界が位置付けられ、それらの境界をどのように綴るかも規則に含められます。別の言い方をすれば、書き手が境界を新規に発見したとしても、それを反映して規則が改定されるまでは、それを綴る方法がありません。

境界と詞の関係

言語記号は境界だけではなく、実際に音として聞こえてくるものもあります。先ほどの二・ハとホ・ハの例では、二、ホ、ハが音として聞こえてくる言語記号です⁵。これらが言語記号であることは、複数の発話に物理的には異なる音声として現れ、それらを話者が同一のものと認定することから直接導かれます。

従って、先ほどの分析で我々は言語記号として二、ホ、ハ、および・の四つの記号を得たことになりますが、これらは発見されたその瞬間から互いの関係が一部見つかっています。すなわち、・の左側には二またはホが現れることができ、右側には

⁵ これらはいずれも複数の記号の集まりですが、複雑な構造を持つ記号もまた記号のひとつです。実際には、それ以上分割することができない原子記号と呼ぶべきものを見つける方法があるかどうかは分かりません。分析によってみつかる言語記号は、常にさらに分割できる可能性を孕んでいます。

ハが現れることができます。このような関係は、境界・は実は二、ホ、ハのような記号のプロパティとして与えられていると考えることで記述できます。すなわち：

- ・ 二 = 二'・
- ・ ホ = ホ'・
- ・ ハ = ・ハ'
- ・ ・ = ・・

つまり、二はその右端に・を含んでおり、二から・を除いた残りの部分が二'である。また、ホはその右端に・を含んでおり、ホから・を除いた残りの部分がホ'である。同様に、ハは・ハ'である、ということです。このとき、二、ホ、およびハに含まれる記号・は、「他の記号と隣り合うときは、・が相手の記号の・と隣り合わなければならない」ということを示すマーカーだと読み替えることができます。

このように、境界はほかの記号の右端または左端に含まれているものとして記述できます。なお、ここまで記号・で表してきた境界は、現在の規則では A4 と呼ばれる境界です。また二、ホ、ハはそれぞれ教育ローマ字では 'rinndokunn ga, 'igityann ga, zimann'banasi wo 'tabèt:a と綴ることができます。これらは A4 が与えられている側の反対側にも規則で認められた境界を持つので、左端の境界をはじめに、右端の境界を次に、その後に綴りを並べることで、以下のようにリストできます。

- ・ P4A4 'rinndokunn ga
- ・ P4A4 'igityann ga
- ・ A4R1 zimann'banasi wo 'tabèt:a

それぞれ「左端に P4 を、右端に A4 をもつ 'rinndokunnga」、「左端に P4 を、右端に A4 を持つ 'igityann ga」、「左端に A4 を、右端に R1 を持つ zimann'banasi wo 'tabèt:a」という意味です。

さて、多数の発話を対象として同様の手続きを行うと、単位はどんどん細かく分析されていき、多数の境界と多数の有音の単位が見つかります。単位をどこまで細かく分割できるかは分かりませんが、単位を表記規則と言語記述において扱う際の便宜

のために、教育ローマ字では「詞」という単位を定義しています。詞は文法理論の中では生成文法でいう formative のような役割を担います。つまり、詞は教育ローマ字の文法理論の中で、一貫した音韻形式と、一貫した意味形式と、一貫した統語的プロパティをすべて同時に与えることができる単位です。規則としては、詞は以下の要件を満たすあらゆる単位をいいます。なお、詞は ver. 2.6 までは semiword と呼ばれていました⁶。ver. 3.0 以降も、詞の英訳として semiword を使うことができます。

(6) **詞の定義**：詞とは、以下の要件をすべて満たす最小の言語単位をいう。なお、「一貫性がある」または「一貫している」とは、その言語単位がどの発話に現れても同じ記載になることを指す。

- a. 詞の音形を表すための記号で表すことができる、音の形式に一貫性がある言語単位であること。
- b. 意味に一貫性がある言語単位であること。
- c. 左右のどちらについても一貫した詞境界が認められること。

なお、c の詞境界とは、これまで述べてきたような通常の分析により得られる境界のうち、規則で**詞境界**として認定したものを指します。これは規則を定める際の恣意によって、どの単位が詞の定義に当てはまるかが変わることを意味します。なお、規則で名前が与えられている境界のうち、韻律階層に位置付けられるものでないものはすべて詞境界です。

また、a について、詞の音形を表すために使うことができる記号は以下の通りです。

(7) **詞の音形の表記に使うことができる記号**：詞の音形には、分節音を表す記号（母音につくドットを含む）のほか、以下の記号を使うことができる。詞の内部にはスペースを入れることはできない⁷。

⁶ 厳密には、詞は最小単位である一方、ver. 2.6 までの semiword は、内部により小さい semiword を含むものとして使われていたという違いがあります。

⁷ これは ver. 3.0 で新規に取り入れられた規則です。ver. 2.6 までは、AP境界があるところには必ずスペースがありました。ver. 2.6 のスペースのうち、語境界でないものは、3.0 では境界下降記号に置き換えられます。

- a. 屈折記号: 以下のどちらかの最大一つだけを使うことができる。屈折記号がない場合は、その詞の左側には語境界がある。
 - a.a. - (hyphen minus): 詞の最初の分節音の直前に置き、詞の左端に語境界がないことを示す。
 - a.b. · (middle dot): 詞の始端または最初の分節音⁸の直後に置き、詞の左端に語境界⁹がないことおよびその左の分節音が屈折の際に削除されるか変形されることがあることを示す¹⁰。
- b. 境界下降記号: 詞の内部にAP境界がある場合は、境界下降記号で示す。
 - b.a. ˘ (下つき境界下降記号): 詞の内部にAP境界があり、かつそのAP境界に境界下降がない場合は、下つき境界下降記号でしめす。
 - b.b. ˊ (上つき境界下降記号): 詞の内部にAP境界があり、かつそのAP境界に境界下降がある場合は、上付き境界下降記号でしめす。また、詞の冒頭に下つき境界下降記号を置くことができる。ただし、語より上位の単位を綴る場合に、そこに境界下降が実現する場合は、その境界下降記号を上付きにする。
- c. アクセント記号: アクセントを示す。なお、記号の上下は語以上の単位の綴りでは入れ替わることがある。

⁸ 子音と母音のことです。

⁹ 詞境界のうち、規則で語境界として定められた境界です。アクセントは語境界から自身の直後のモーラまでに「効く」ので、詞の左端に語境界がないことは詞に与えられたアクセントが左隣の詞まで効きうることを意味します。

¹⁰ middle dot が最初の分節音の直後よりも右に置かれないことは、屈折の規則を簡潔に保つとともに、過分析を防ぐ意味があります。言語記述において、規則を設定するのは現象を説明するためですが、規則を無制限に複雑にして良いわけではなく、一定の制限のもと、できるだけ多くのことを説明できることが重要です。

c.a. ' (上付き¹¹アクセント): 詞の内部にAP境界がある場合はそれぞれの二つ目以降のAPには必ず一つだけ置かれる。最初のAPには最大で一つ置くことができる。

c.b. _↓ (下付きアクセント): 屈折記号を含む詞の最初のAPに限り、最大で一つ置くことができる。詞のそのAPの部分に上付きアクセントがある場合は、下付きアクセントは必ず上付きアクセントよりも右に置かれる。詞の形を単独で示す場合は、下付アクセントが条件アクセントを示す。

d. プレースホルダー: 詞が屈折記号を含む場合に限り、アクセント記号は詞の最初の分節音の1モーラ左に現れることができるため、必要な場合には (_) をアクセント記号の右側に置くことで1モーラ分のプレースホルダーとする。これは詞をそれ自体として示す場合のみに用いられ、語以上の単位の綴りには現れない。プレースホルダーは最大で1つしか現れない¹²。

e. イントネーション記号: 略¹³。

この定義に従い、イとロに含まれる詞をリストアップすると以下ようになります。

- R2A1 'rinndokunn
- R2A1 'igityann
- A1A4 ga
- R2A1 zımann'banası
- A1A4 wo
- A4 d-vi 'tabè

¹¹ 「上付き」と「上つき」の区別はありません。「下つき」についても同様です。

¹² これは、詞のアクセントは詞の分節音の1モーラ左よりも左に現れることがないことを意味します。

¹³ 主に文末に近い位置に現れる詞には、句末イントネーションを表す記号を使うことがあります。具体的なイントネーション記号のリストはここには記載しません。イントネーション記号は、母音ドットのように分節音の上に重ねて表示されます。

- d-i R1 t-a

境界の名前が左右でマッチしていない組み合わせがあります。たとえば、'tabè の右側は d-vi という境界であり、t-a の左側は d-i という境界なので、この2つを並べて 'tabèt-a とするのは辻褄が合わないようにも見えます。これについては「詞境界と語境界」を参照してください。

語と詞の関係

語は詞よりも少し大きい単位です。語境界は必ず詞境界ですが、詞境界には語境界とそうでないものがあります。語は必ず一つ以上の整数個の詞で構成されます。

- (8) **語の定義**：連続する一個以上の整数個の詞からなる単位で、左右に語境界を持ち、かつ、下つきアクセント記号とプレースホルダーを使うことなく一貫した音形を記載することができる最小のものを語という。

この定義に従い、イとロに含まれる語をリストアップすると以下ようになります。

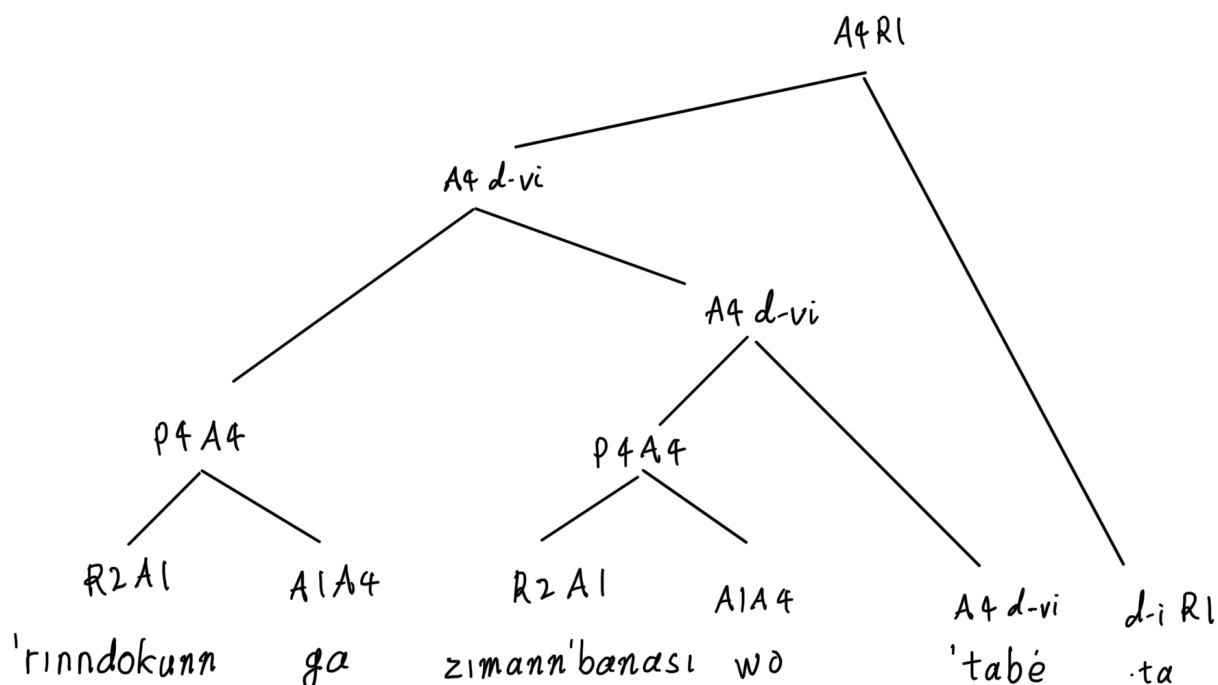
- R2A1 'rɪndokunn
- R2A1 'ɪgityann
- A1A4 ga
- R2A1 zɪmann'banasɪ
- A1A4 wo
- A4R1 'tabèt-a

語境界は「詞境界と語境界」のなかに掲載している表で示しています。語境界を挟んで両側に語があるときは、その間にスペースを置きます。

再帰的な語境界

当然のことながら、境界はそれによって得られる単位に先立って発見されるため、単位が得られているときは自然に2分木ができています。（すべての場合について2分

木が一意に決まるとは限りません。たとえば、A1A4 の直上のフレーズは R2A4 であっても矛盾はありません。また、A4 d-vi はもしかしたら P4A4 よりも先に d-i R1 と結びつくかもしれません。従って以下に示す統語構造は複数の可能な分析のうちの一つです。) たとえば 'Rinndokunn ga Zimann'banası wo 'tabét-a. は以下のような構造を持ちます。



'tabé が持つ A4 境界が上のフレーズまで引き継がれているのがわかると思います。

ただし、上のフレーズが A4 境界を持つことは、'tabé がその左側に A4 境界を持つことよりも先に発見されているので、これは分析のプロセスを逆に辿っていることになります。

また、ga, wo については左側の境界が上のフレーズに引き継がれず、P4 となっています。P4は最も上位に位置する境界で、概ね文末に相当します。

このように、詞がふたつ結びついてできたフレーズの左右の境界には一定の法則があり、特に、右枝にある語の左側の A4 と左側の R2 が上位に引き継がれることが重要です。

\$ 理論

\$ 理論とは

(9) \$ 理論：Rの分布を情報構造とAPレベルの統語構造に結びつける主張で、以下のよう表現できます。

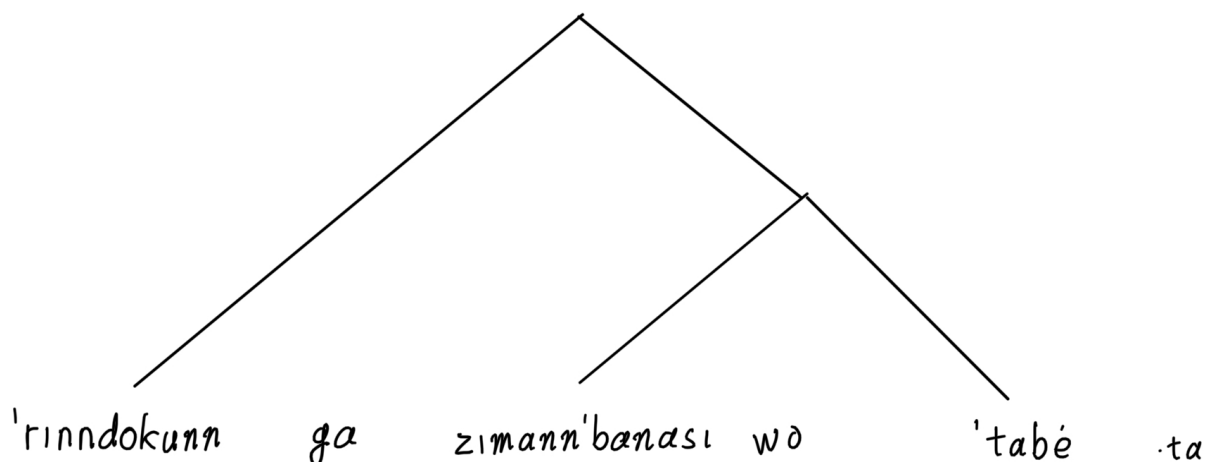
- a. ある AP が R を持つとき、その AP を含む句の最初の AP 境界から始まる AP もまた R を持つ
- b. 一つの AP は音韻素性 \$ を最大でひとつ持ち、\$ を持つ AP は R を与えられる
- c. \$ は情報構造によって一つの発話に最低1つ与えられる

a と b は次のように要約することができます。

- ・ (a, b). \$ を含む句の最初の AP 境界から始まる AP は R を持つ

このとき、統語構造がAPレベルのものであることに注意が必要です。AP冒頭に位置しない詞は無視して考えることになります。従ってこの時の「統語構造」というのは、厳密には統語部門におけるものではなく、音韻部門におけるものだということです。また「音韻構造」と呼んで差し支えないものだと思います。

たとえば、先ほどの 'Rinndokunn ga Zimann'banası wo 'tabèt-a. は、以下のような音韻構造を持ちます。



\$ 理論は表記規則の一部ではありませんが、教育ローマ字を支える理論の一つです。R の分布を確認することにより、文の統語構造を簡単に確認することができるためです。

たとえば、'Rinndokunn ga zimann'banasi wo 'Tabét·a. は不自然ですが、'Rinndokunn ga Zimann'banasi wo 'Tabét·a. は普通です。これは、(A (B C)) という構造において、どのように \$ を配置しても A と C のみが R を持ち、B が持たないというパターンが得られないことによって説明されます。アクセント句3つからなる発話の \$ の分布は以下のパターンがあります。なお、ここでは4は\$がないことを示します。

- 44\$, 4\$4, 4\$\$, \$44, \$4\$, \$\$4, \$\$\$

(A (B C)) において、これに対応するRの分布は以下の通りです。なお、ここでは Lv は R がないことを示します。

- RRR, RRLv, RRR, RLvLv, RRR, RRLv, RRR

(A (B C)) において、ここに現れていない組み合わせは不可能だということを \$ 理論は予測します。

情報構造との対応

\$ の分布は概ね、その発話が何に答えようとしているかによって決まります。'ri nndokunn ga zımann'banası wo 'tabèt·a. であれば、「誰が？」に答えようとしてこれをいうのであれば、\$44, RLvLv が得られます。同様に、「何を？」であれば 4\$4, RRLv であり、また食べたか食べなかったのかを答えようとしているのであれば 44\$, RRR です。

同様に、疑問文の場合、\$ の分布は話者がその質問で何を知りたいかに対応します。